

◆【海員随想】シイラ再び③ 井上康平

「すれ違う船から、お前ら漁師か！ と指さされるぞ」とだれかが言い

「こんなことしている中型セメント船はほかにいないだろう」とみんなが笑った。

2001年夏、設置した可動式竿固定装置は「巨大な敵」の出現で1カ月余り道具をとられ続けた。大物用完全装備がなされ決戦の時がきた。

セメント業界の末端に身を置き須崎を拠点にピストン運航していた頃の話だ

われわれは時代に対応するために、頭で考えることが多くなった。世の中は明るい話題より暗いニュースが多い時代になった。その中であって、海上に浮かぶ鉄の箱で生活し、予定を確実に消化するだけの航海が続けば、ますます陸上と海上の隔たりは広がり、一般社会に隔離された孤独感が心を支配する。

人の心が渴けば船内の雰囲気は湿っぽくなる。だから連帯感よりも個人優先のドライな職場環境への頭の切り替えが必要になる。休暇でリフレッシュして、乗船中はスマートに割り切って生きる。それが現在の船乗りにとって時代のトレンドなのかもしれない。

そう考えれば、こんな釣りなんて面倒くさくて、くだらない余興にすぎない。けれど古き良き時代から変わらないシイラの刺身やあら汁、干物が食堂に並び、われわれの胃袋を満たす喜びを共有したとき、それまでの渴いた心が潤うことはないだろうか。「構えて」「釣って」「食べる」という船内のまとまった空気に人間関係が和らぐことはないだろうか。

僕にとってこの海からの恵みは、唯一海との接点であり、自分自身の存在を再確認する手段だと思う。前向きに生きる気持ちに時代なんて関係ない。たとえちっぽけでも目標を持っている限り人は成長する。今はただ、そのきっかけを見失っているだけなのだ。

「来たあ～！」

「喰った！ 喰った！ 喰ったあ～！」

「行け！ 行け！ 行けえ～！」

奇声を張り上げプープデッキにひた走る。

“**keep a sharp look out**” 安全航海と魚たちとの戦いの海にて今日も明日もその次の日も、僕は走り続けるだろう。